親鸞聖人の著作にみえる『自然』という語の意味に関しての一考

安東大隆

はじめに

現在「自然」という語は、「シゼン」とよまれ、名詞として、人為に対する自然、特に、天然自然として、周囲の、山川草・木などを、総称する語として、使用されている。そして又、「自然に」という、副詞として、人為を加えないで、そのまま、というような意味に、用いられている。

さて、真宗では、「自然」という語に、非常に、重い意味を、持たせている。一般に、それは、三種類に、分類されている。即ち、業力（業道）自然・願力（他力）自然・無為自然である。

親鸞は、その著作の中で、「自然」という語を、さかんに、用いている。一見しても、それらは、所謂浄土三部経や、七祖のといているところに、よっていることが、多い。小考では、順序として、浄土三部経について、「自然」という語が、どう使用されているかを見、更に、七祖は、どうとりあつかっているか、その主なものをみたい。しかる後に、それらを、ふまえて、親鸞の著作の使用例に、言及したい。このように、経典に、溯っていく、考え方は、親鸞自身が、『歎異抄』の中で、示した考え方、でもある。

経典に使用されている自然 (1)

浄土教の、所依の経典として、大無量寿経（大経）・観無量寿経（観経）・阿弥陀経（小経）の所謂、浄土三部経がある。まず、これらの経典に、使用されている例を、みよう。各々の経典に、使用されている回数を、みると、大経には、五十六回、使用されている。それに対して、観経には、六回であり、小経には、一回である。ここでは、大経を、中心として、考えを、進めていこう。

大経の五十六回を、詳しくみると、「自然に……」という形で、使用されて、いるものが、二十六例である。猶、残りの三十例は、一定の型では、述べられないので、後に、まとめて、言及したい。「自然に……」という形で、使用されているものの、例を、挙げると、四十八願の第四十六願（随意聞法願）の中に、次のように、使用されている。漢訳では、

設我得仏　国中菩薩　随其志願　所欲聞法
自然得聞　若不爾者　不取正覚

延べ書きにすると

たとひ、われ仏をえたらんに、国中の菩薩、その志願にしたがひて、きかんとおもはんところの法、自然にきくことを得ん、もししからずば正覚をとらじ（延べ書きは定本親鸞聖人全集による、八巻35頁。以下の大経の頁数はこれによる。傍線は私に施す。以下同じ）

又、梵文和訳を、挙げると

世尊よ、もしも、わたくしが覚りを得た後に、かの仏国土に生まれた生ける者どもが、説法を聞きたいと願ってそういう心をおこすと同時に、聞くことができないようであったら、その間はわたくしは、この上ない正しい覚りを現に覚ることがありませんように。[2]

国中の菩薩が、法を、聞こうと、思うと、その法を、自然と、聞くことが、できる。（その法が、自然と、きこえてくる）と、言っている。法を、聞きたいという意志を、持った時は、すぐに、その法を、聞くことが、できると、いうことである。一般には、何かを、為そうという意志が、おこると、それが、行動として、あらわれ、その結果、その意志が、具体的な事実として、完成するのである。ここでは、何かを、思うと、そのことが、そのまま、適えられるという、意味である。それを「自然に」と、言っている。それが、梵文和訳の、「心をおこすと同時に聞くことができないようであったら」という意味に、相当しよう。そこには、一般的な考え方（意志と、それにもとづく行為と、その結果）とは、趣を、異にしている、考え方がある。

さて、更に、「自然に……」というような形で、使用されている例を検討してみよう。試みにそれらを、別の言葉に、置

き換えるとすると、大概、「人や物が、力を加えていないのに……する（なる）」というような意味と、なる。それは、主に、浄土についての描写と、五悪段の中で、使用されている。

浄土の描写の個所を、みると

○（浄土においては）清風ときにおこりて、いつつの音声をいだす。微妙に宮商、自然にあひ和す。また、無量寿仏のその道場樹、たかさ四百万里なり。そのもと、周囲五十由旬なり。枝葉よもにしきて二十万里なり。一切の衆宝、自然に合成す。（51頁）

○講堂・精舎・宮殿・楼観・みな七宝荘厳して、自然に化成す。（53頁）

○もし（浄土の）宝池にいりて、こころにみづをしてあしをひたさしめんとおもへば、みづすなはちあしをひたす。ひざにいたらしめんとおもへば、すなはちひざにいたる。……身にそそがしめんとおもへば、自然に身にそそぐ。（55頁）

○（かの仏国土においては）もし食せんとおもふときは、七宝の鉢器、自然にまへにあり。金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・明月真珠、かくのごときの諸鉢、こころにしたがひていたる。百味の飲食、自然に盈満す。この食ありといへども、實に食するものなし。ただ、いろをみ香をかぐに、こころに食をなすとおもへり。自然に飽足して、身心柔輭なり。（57頁）

等が、そうである。浄土の音楽は、五音が、自然に、調和しており、宮殿は、七宝で、自然に、出来ており、その浄土宝池の水は、思いに、従って、自然に、身にそそぐ。又、食事を、しようと、思えば、七宝の食器が、自然に、前にある。そして、その食器が、自然に、一杯になり、その香りを、かいだだけで、自然に、満ち足りる。それらは、全て、人為を超えたところで、なし得る行動、である。

一方、五悪段の方を、みると

○そのひとつの悪といふは、諸天・人民・蠕動の類、衆悪をつくらんと欲して、みなしからざるはなし。　つよきものはよはきを伏す、うたたあひ剋賊し、殘害殺戮して、たがひにあひ呑噬す。善を修することをしらず、悪逆無道にして、のちに殃罰をうけて自然に趣向す。（99頁）

弱肉強食ともいうべき、この世で、その悪習に、染ってしまい、悪逆をばかり、行っているような者は、その果報により、自然と、悪道に、落ちてしまう。

○今世に悪をつくりて、福徳尽滅しゐれば、もろ〳〵の善鬼神、をの〳〵さりてこれをはなる。身ひとりむなしくたちて、またよるところなし。寿命終尽して諸悪の帰するところなり自然に迫促して、ともにおもむきてこれをうばふ。（108頁）

この場合も、先の例と、ほぼ同じであり、自然に、悪道に、おもむくと、説いている。三塗の無量の苦悩も、「自然」であり、自然にうけるもの、であった。

浄土に、ついてのもの、五悪段に、ついてのもの、両者共に、その究極に、おいては、人為を、超えた、存在であり、人間の分別に、よっては、左右できないもの、である。その、人為を超えた存在と、いう考え方は、更に、徹底され、「自然」という語に、より深く、かつ、重大な意味を、与えている。

以下、「自然に……」という形で、使用されている以外の、三十例について、言及してみよう。その例の中でも、やはり、浄土や、浄土に関する奇瑞の、描写の中で、「自然」という語は、多用されている。

法蔵比丘が、四十八願を、説き終った後、偈を以って、その趣を、述べると、地が、六種に、震動して、天より、妙花が、地の上に、降りそそぎ、空中には、「自然の音楽」が、ある（39頁）。そうして、建立された浄土は、「自然の七宝」を以って、地となし（43頁）、空には、「自然の万種の伎楽」があり（53頁）、聞こうと思えば、「自然の妙声」を、所応に、従って、聞くことが、できる（55頁）。その妙声は、「自然快楽のこゑ」である（56頁）。又の浄土を、吹く風は、「自然の徳風」（61頁）であり、「自然のかぜ」（78頁）である。

浄土に、関するものを、「自然」として、把握する、考え方は、更に、すすんで、悟りそのものをも、「自然」として、理解している。

かの仏国土は、清浄安穏、微妙快楽なり。無為泥洹の道にちかし。そのもろ〳〵の声聞・菩薩・天・人は、智慧高明、神通洞達せり。咸同一類にして、かたちに異状なし。ただ餘方に因順するがゆへに、天・人の名あり。顔貌端正にして、超世希有なり。容色微妙にして、天にあらず、人にあらず。みな自然虚無の身。無極の體をうけたり（57頁）

阿弥陀仏の浄土は、無為泥洹の道である。又、諸〻の衆生は、咸同一類（皆同じ類）であって、全ての衆生が、自然虚無の身、無極の體」を、受けている。即ち、悟りそのものと、同一になった、境地を、「自然虚無の身・無極の体」と、表現して、いるのである。

以上が、大経に、使用されている、「自然」の意味の、大要である。大経の中では、「自然」という語が、非常に、重要な意味を、持っていることが、わかる。浄土は、自然に、存在するものであり、又、三塗無量の苦難も、自然に、受けるものである。そして、浄土において、受ける身も、「自然」である。このような、大経における、用法は、浄土教の、典籍の中に、多大な影響を、およぼしている。

さて、次に、観経に、使用されているものを、みよう。観経には、六回、使用されており、詳細は、次のようである。

○（阿闍世によって、幽閉された、頻婆娑羅王は、佛口より、発せられた、五色の光に、照らされて）大王幽閉ありといえども心眼さはりなくして、はるかに世尊をみたてまつりて頭面に礼をなす、自然に増進して阿那含となる。（定本

親鸞聖人全集第八巻142頁、以下同じ）

○（宝樹観を述べた個所）一々の樹上に、七重のあみあり。一々のあみのあひだに五百億の宮殿あり、梵王宮のごとし。諸天の童子、自然になかにあり。……このもろ〳〵の宝樹、百行あひあたり、葉葉あひちかし。もろ〳〵の葉のあひだにをいて、もろ〳〵の妙華を生ず。はなのうへに、自然にも宝のこのみあり。（148頁）

○（華座観を述べた個所）一々の摩尼、千の光明をはなつ。そのひかり蓋のごとし、七宝合成せり。あまねく地上におほへり。釈迦毗楞伽宝をもて、その臺とす。この蓮華臺は八方の金剛・甄叔迦宝・梵摩尼宝・妙真珠網をもて交飾とす。その臺のうへにをいて、自然として四柱の宝幢あり。一々の宝幢、百千万億の須弥山のごとし。（154頁）

○（真身観を述べた個所）このゆへに智者まさに心をかけて、あきらかに無量寿仏を観ずべし。無量寿仏を観ぜんものは、ひとつの相好よりいれ。ただ眉間の白毫を観じて、きはめて明了ならしめよ。眉間の白毫をみたてまつれば、八万四千の相好自然にまさに観ずべし。（160頁）

○（観音観を述べた個所）（観音菩薩は）あしをあぐるとき、あしのしたに千輻輪の相あり。自然に化して五百億の光明臺となる。（162頁）

以上が、その六個所である。これらの用法は、大概、大経のそれに、順ずるものである。

小経には、一個所で、

舎利弗かの仏の国土には、微風ふきて、諸の宝行樹および宝羅網を動かして、微妙の音を出だせり。譬ふれば百千種の楽を同時に倶に作すがごとし。是の音を聞く者はみな、自然に念仏念法念僧の心を生ず。（国訳一切経宝積部七・78頁）

とあり、浄土の宝樹に、風の吹く音を、聞いて、仏・法・僧を、念ずる心の、生じる様を、「自然に」と、把握している。

(2) 高僧の著作に使用されている自然

さて、これら、浄土三部経に、あらわれている、「自然」の用法は、以後の、浄土教の高僧達の、著述の中に、色濃く、その影を、おとしている。高僧達は、自分の思想を、披瀝するのに、三部経を、基礎にして、そのまま引用したり、又、それによって、叙述したり、している。

浄土論註には、観経を、引用して、

此ノ蓮華臺ハ八万ノ金剛甄叔迦宝梵摩尼宝妙真珠ノ網ヲモテ厳修トナル、其ノ臺ノ上ニ於テ自然ニ而シテ四柱ノ宝幢アリ、一々ノ宝幢ハ八万四千億ノ須弥ノ如シ

又、大経を、引用して

若シ宝池ニ入テ意ニ水ヲシテ足ヲ没シメント欲ヘハ水即チ足ヲ没ス……、身ニ灌カシメント欲ヘハ自然ニ身ニ灌ク。

他にも、いくつか、例を、あげることが、できるが、大体に

おいて、これらは、経典（大経や観経）からの、引用であり、極楽に、関する、記述の中に、多く、見出されている。この傾向は、他の著作においても、共通するものである。以下、高僧の著作から、適宜、例示しておこう。

○其レ衆生アリテ我国ニ生スル者ハ、自然ニ勝進シテ常倫諸地ノ行ヲ超出シテ仏道ヲ生スルニ至ル（安楽集）

○讃ニ云ク、地下ノ荘厳七宝ノ幢ハ、無量無辺無数億ナリ。八方八面ニシテ百宝ヲモテ成セリ、彼ヲ見ルニ無生自然ニ悟ル。無生ノ宝国ハ永ク常タリシ（定善義）

○弥陀佛国ハ最モ勝レタリト為ス、広大寛平ニシテ寶ニ是レ精ナリ、天ノ楽ノ音声常ニ遍満ス、黄金ヲ地ト為シテ奇珍ニ間ヘタリ、昼夜六時ニ華ヲ自散ス、法音常ニ説テ自然ニ聞ク（法事讃）

○佛ノ言ク是ノ故ニ智者一心ニ諦ニ無量寿仏ヲ観ズベシ、一ツノ相好ヨリ入レ、但、眉間ノ白毫ヲ観シテ明了ナラ令ル者、八万四千ノ相好自然ニ之ヲ見ル（観念法門）

○専ニ名号ヲ称スルモノ西方ニ至ル、彼ニ到テ華開テ妙法ヲ聞キキ、十地ノ願行自然ニ彰ハル（往生礼讃）

○香華ヲ受得スルコト千万種ナリ、即チ弥陀大会ノ上ニ散ス、所散ノ華変ジテ盖ト成ル、自然ノ音楽遶ルコト千重ナリ（般舟讃）

○蓮花初開の楽とは、行者かの国に生れ已りて、蓮花初めて開く時、所有の歓楽、前に倍すること百千なり。猶し盲者の始めて明かなる眼を得たるが如く、また辺鄙の、忽ち王宮に入れるが如し。自らその身を見れば、身既に紫磨金色の体となり、また自然の宝衣ありて、鐶・釧・宝冠・荘厳すること無量なり。（往生要集）

○（極楽往生を願う）これらの衆生は、寿終る時に臨んで、無量寿仏もろ〳〵の大衆とともに、その人の前に現じて、即ちかの仏に随ってその国に往生して、便ち七宝の花の中において自然に化生して不退転に住す。（選択集）

さて、このように、高僧の著作の中に、散見される「自然」で、特に、注目すべきは、善導の『法事讃』の、次の文である。

願クハ往生セン、願クハ往生セン、道場清浄ナリ希ニシテ見難シ。弥陀ノ浄土ハ甚ダ聞キ難シ、聞キ難クシテ見難キニ今会フコトヲ得タリ。如説ニ修行シテ意ヲ専ニシテ専ナラシム。願クハ仏ノ慈悲遙カニ臨終ニ摂受シテ、宝座其ノ前ニ現ジタマヘ、既ニ蓮台ヲ見テ心踊躍シテ佛ニ従フテ消遙シテ自然ニ帰ス。自然ハ即チ是レ弥陀ノ国ナリ。無漏無生ニシテ即チ真ナリ。（定本親鸞聖人全集九巻55～56頁）

臨終に、仏の迎えがあって、往生する。所謂、来迎による往生を、のべている、個所であるが、その往生すべき浄土を、「自然」と、表現して、いることである。それは、いうまでもなく、善導自身が、言葉を、続けているように、弥陀国であり、西方浄土である。他の高僧の著作を、一見すると、ここまで、

はっきりと、言い切っているものは、ないようである。これは、大経の「自然虚無の身、無極の躰」と、あいまって、浄土教における、「自然」という語の意味を、端的に、物語っているものであろう。

(3) 親鸞の著作の中に使用されている自然

さて、これらの、経典や高僧の理解は、それらを、基礎にしている、親鸞の中で、どう吸収理解されて、いるのであろうか。

親鸞も又、前述したように、主著である、『教行信証』をはじめ、消息類、和讃等の中で、「自然」という語を、多用している。

親鸞は、大経の意味を、更に、すすめて、「自然」は、阿弥陀仏の浄土である、ということを、述べている。即ち

仏に従ひて消遙して自然に帰す。自然は即ちこれ弥陀の国なり。無漏無生還りて即ち真なり。行来進止に常に仏に随ひて、無為法性身を証得す[14]（『教行信証』真仏土の巻 原漢文）

とある。この文は、善導の、『法事讃』の文章を、そのまま、引用したものであり、そのことは、善導の理解に、対する、親鸞の共感を、あらわしている。又、和讃にも

○念仏成仏これ真宗、万行諸善これ仮門　権実真仮をわかずして　自然の浄土をえぞしらぬ[21]（浄土和讃）

○五濁悪世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてて、自然の浄土にいたるなれ[12]（高僧和讃）

○信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり　自然はすなはち報土なり　證大涅槃をうたがはず[15]（高僧和讃）

とあり、同じく、「自然」は「浄土」である旨を、のべている。又、『教行信証』（証巻）には、大経を、引用して

かの仏国土は、清浄安穏にして微妙快楽なり、無為泥洹の道にちかし。それもろ〳〵の声聞・菩薩・天・人、智慧高明にして、神通洞達せり。ことごとく同じく一類にして、形異状なし。ただ余方に因順するが故に、人天の名あり。顔貌端正にして世を超えて希有なり。容色微妙にして天にあらず、みな自然虚無の身、無極の体を受けたるなり（140頁）

とある。この一文は、真仏土巻にも

往生と言ふは、大経には「皆受自然虚無之身無極之体」と言へり（185頁）

と、引用されている。往生というは、「自然」に、帰すこと、であり、「自然」と、同一になること、である。

さて、親鸞自身が、「自然」という語を、釈しているのを、みると、『尊号真像銘文』に、「自致不退転」を、解釈して

「自致不退転」といふは、自はおのづからといふ、おのづからといふは衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり、自然といふことばなり[21]

又、「必得往生」を、解釈して

「必得往生」といふは、かならず往生をえしむといふなり。必はかならずといふ、かならずといふは自然のこころをあらわす、自然ははじめてはからずとなり。

とある。『唯信鈔文意』では、「観音勢至自来迎」を、解釈した中で、

自はみづからといふなり……また自はおのずからといふ、おのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ、しからしむといふは行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未来の一切のつみを転ずと、「自然」を、「おのづから」「しからしむる」と、わけて、といている。『末燈抄』では、更に、詳しく

自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからいにあらず、しからしむといふことばなり。然といふは、しからしむといふことば、行者のはからいにあらず、如来のちかひにてあるがゆへに。法爾といふは、この如来のおむちかいなるがゆへに、しからしむるを法爾といふ。法爾は、このおむちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひのなきをもて、この法のとくのゆへにしからしむといふなり。すべて、人のはじめてはからはざるなり。このゆへに他力には、義なきを義とす、としるべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。弥陀の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへむとはからはせたまひたるにより て、行者のよからむとも、あしからむともおもはぬを、自然とはまふすぞとき、て候。ちかひのやうは、無上仏にならしめむとちかひたまへるなり。無上仏とまふすは、かたちもなくまします。かたちのましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはまふさず

と、といている。「自然」というは、「おのづから、しからしむる」と、いうことであり、それは、行者の、自力の、思慮分別に、よって、そうなっている、のではなく、阿弥陀仏の本願によって、そうなっている、のである。

さて、親鸞は、このように、経典や、高僧の所説を、引きながら、自分の思想を、開陳している。その、述べているところは、大概において、大経や、善導の、といているところに、そったものである。

おわりに

浄土教における、「自然」という語の、理解は、根本の経典である、三部経によって、発せられる。猶、漢訳のものと、梵文直訳のものとを、比較すると、漢訳の中の、いくつかの、「自然」は、梵文直訳の中に、相当する語を、見い出せない、ものがある。しかし、漢訳が梵文を、正しく、訳出したものか否かを、問わず、等しく、釈尊金口の正説として、理解さ

れている。従って、三部経の所説は、そのまま、高僧の著作に、うけつがれ、更に又、親鸞にと、うけつがれていった。そして、浄土教の中で、非常に、重い意味を、持つものと、なっていった。

「自然」とは、他から加わる力を、否定して、それ自身の、中にあるものに、よって、そうなること、である。それは、人為を、超えるという要素を、含んでいる。そういう意味でいうと、浄土という了解は、まさに、適合するもの、であろう。人為によって、造作されたもの、でなく、阿弥陀仏の誓願の、成就の結果として、存在するもの、であり、生滅変化を、超越した、常住絶対の世界が、「自然」であり、又、浄土である。それは、悟りそのものの世界、である。人為による分別を、完全に、否定し、全てのものを、阿弥陀仏の力として、理解し、それを、信ずることにより、広大無辺の慈悲によって、摂取されるという思想が、徹底されれば、される程、「自然」という語の持つ意味は、より重く、かつ深く、なっていくのである。その意味でいうと、親鸞の、了解している、「自然」が、もっとも、徹底された姿を、示していると、いいうる。

註

①歎異抄　第二章を参照

②岩波文庫『浄土三部経』上　中村元・早島鏡正・紀野一義各氏訳註　37頁

藤田宏達氏訳（梵文和訳無量寿経・阿弥陀経〈法蔵館〉）では

もしも、世尊よ、わたくしが覚りを得たときに、かしこの仏国土に生まれるであろう菩薩達が、どのような説法を聞きたいと欲しようと、「そのような」心を起こすと同時に、そのとおりのものを聞けないようであるならば、その間は、わたくしは無上なる正等覚をさとりません。（72頁）

とある。

③梵文和訳では

罪に随って自然に果報に導かれる（岩波文庫本89頁）

④梵文和訳では

寿命が尽きると、自然の結果として、さまざまな悪に圧迫せられて、赴くべきところに導かれるのだ。（岩波文庫本95頁）

⑤「自然の音楽」にあたるものは、梵文和訳の中にはない。

○岩波文庫本は（声あって言う）と（　）に入れておぎなっている。

○藤田氏訳は、〔と声があった〕とおぎなっている。

⑥「自然虚無の身・無極の躰」にあたる部分は、梵文和訳では、見出せない。

⑦七祖聖教延書（顕道書院）によった。同書40頁。

⑧延べ書きは、岩波書店、日本思想大系、『源信』54頁

⑨延べ書きは、岩波書店、日本思想大系『法然・一遍』109頁

⑩延べ書きは、岩波書店、日本思想大系『親鸞』183頁　同じ内容

が、『阿弥陀経集註』(定本親鸞聖人全集七巻240～241頁)にもある。

⑪定本親鸞聖人全集二巻44頁
⑫　〃　二巻115頁
⑬　〃　二巻118頁
⑭　〃　二巻44頁
⑮　〃　三巻54頁
⑯　〃　三巻159頁
⑰岩波書店　日本古典文学大系『親鸞集』122～123頁　これは「獲得名号自然法爾」定本親鸞聖人全集二巻220～223頁と同じである。
⑱大経の訳出には、老荘思想の影響があるという御指摘がある。
(講談社新書「無」の思想　森三樹三郎博士著)